
ヤーヌケディオの王子

榎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヤーヌケデイオの王子

【Nコード】

N5618S

【作者名】

榎

【あらすじ】

ヤーヌケデイオ国第一王女フィアは、隣国の王子アドールとの婚礼を間近に控える身。しかしフィアはその一方で、弟であるユネスに姉弟以上の感情を抱かれており

登場人物

> i 2 2 2 9 4 — 2 9 8 5 <

ヤーヌケディオ国

フィア・ヤーヌケディオ（17）・・・婚礼を目前に控えた第一王女。

ユネス・ヤーヌケディオ（15）・・・穏やかな物腰の第二王子。

ヤーヌケディオ王・・・国王

アシス国

アドール・キトレビオ・アシス（19）・・・フィアの政略結婚の相手。強引な人。フィアとは両思い。

世界観 魔術やそれを助ける法具ほうぐなども一応出てきます。ふぁんたじー。

メナチエデの鏡・・・血液による魔術を可能にする法具。
神竜・・・

***登場人物* (後書き)**

T
T

禁断のキス（前書き）

姉弟同士の恋愛を含んでおります。苦手な方は回避してください。

禁断のキス

気づいたときには、思わず息を潜め凝視していた。

木々の隙間から陽光の差し込む中庭で

自らの婚約者であるフィアと、その弟が交わす、禁断の口付けを。

フィアにはすでに意識がないのか、弟のユネスにされるがままとなっている。

しばらくしてユネスは、彼女の腰に手を回し、地面に寝そべらせた。

その時点でアドールの思考はユネスの行動を先回った。
弟が姉を組み敷く、そんな姿を連想したのだ。

人の動く気配を感じ取り、振り返る。しかし、そこにはすでに気配はなかった。

ユネスはそれだけで誰がいたのか十分に確信した。

「アドールか」
ポソリと呟く。

おそらく自分たちを見ていたのは、姉の婚約者のアドールだ。

「あーあバレちゃった」

一人で暴走してねじ込ませた唇が、今更ながらにヒリヒリと痛み出した。

ユネスは、姉と自身の唇をだらしなく繋ぐ糸を見て、幸福そうに目を細めた。

ユネスは姉としてではなく女性として、フィアを意識し、好いていた。

その事実はアドールとユネス自身の証言により、互いの父である
ヤーヌケディオの王にのみ、明かされた。

実父である王は、息子であるユネスに再三長々と問いただした。

ユネスはそれに対し一つ頷き、短く返した。

「はい。偽りなく」

フィアが目覚めぬうちに、ユネスの軟禁処分は決定した。

メナチエデの鏡

「そこにあるのがメナチエデの鏡だ。お前も知っているだろう」

「ええ。私も魔術師の端くれですから」

「こいつは、禁忌の術の一つ『血縁者の封印』を可能とする法具だ」
王に対しユネスはゆっくりと返事を返した。

ユネスにとって、実物を見るのは初めてだった。

メナチエデの鏡。

術者と血縁関係にある人間を封印するために用いる法具。

ユネスは今から、実父である王の血によって、この鏡の中に閉じ込められる。

なぜ血を必要とするのかと言えば、それが絶対に破られることのない錠の役割を果たすからだ。

閉じ込められる側のユネスと術者である王が血縁関係であるかぎり、メナチエデは絶対的な壁として立ちふさがる。いわゆる条件反射による壁だ。

強力な部類の法具ではないと聞くが、物理的にねじ伏せられる代物ではないのは確かだ。

王の血によって描かれた魔法陣の中へ、ユネスは踏み入った。

そして彼を映したメナチエデの鏡がカタカタと呼応しはじめる。

突如、強い光を放った鏡は、一瞬にしてユネスと魔法陣を勢いよく飲み込んだ。

カラカラと音を立てながら床で落ち着いた鏡は、王の手により元の位置に戻された。

鏡の中は実に不思議な空間だった。

どこもかしこも真っ暗で黒一色だというのに、なぜか自身の体だけはくつきりと見える。ユネスは首をかしげた。どういう仕組みだ。黒い景色の中に、水面に雫をたらしたような波紋が、そこかしこで揺れているが見える。

壁や床や天上といった概念のない牢獄。ユネスが想像していたよりもずっと鏡の中は幻想的だった。

さて、王は一つ大きな勘違いをしている。

血液を使用する術は、それにかかわった者が死ぬ恐れがあるため、一般的には“禁忌の術”とされている。

メナチエデの鏡はその禁忌の術の一つ『血縁者の封印』を確実に可能とする法具。王はそう解釈していたが、実際は違う。

「これはもつと、万能なもの。メナチエデの鏡は『血による術、そのほとんどを可能とする』完全なる“禁忌解法の法具”だ」

つまりここでならユネスも、禁忌の術が使えるところだ。

許されぬこと

ファイアが目覚めないのは、ユネスによるものではなかった。
ファイアは、ユネスとは違い、魔力が十分にそなわっているわけではない。ゆえに盛られた毒に対する抗体がなく倒れたのだ。

つまりユネスはファイアを救うために、ああいった方法をとったということ。

しかし、ファイアへの想いが偽りでないことも認めていた。
意思を示したからといって何が変わるでもなし。愚かな息子だ。

深夜。

ファイアはようやくと瞼を開け、眠りから覚めた。

そして間をおかず、自身の異変に気づく。

起き上がれない。

起き上がるどころか、身動き一つ。

なぜ。毒による作用か。いや違う。

これは・・・っ金縛りだ・・・！！！！

でも、どうして。誰が！

「っん」

誰か！！

お父様！ユネス！

アドルっ！！

「ファイアッ！！」

「！！」

ユネス・・・っ！

ユネスの声がした方向から、衝撃波のような風塵が、何かを弾くように飛んだ。

それにより急激に開放された彼女は、軋むベットの上でトランポリンのように跳ねた。

「ファイア！ファイア！大丈夫！？」

ユネスとファイアは互いに両手で手を握り合った。

やがて落ち着いてから、ユネスはベッドに腰を下ろし、見下ろすようにして彼女の顔を覗き込んだ。

「ユネス……、ありがとう」

「ううん。それより聞いてファイア。誰かが君を殺そうとしてる」

「うん。そうみたいね……。でも、どうして？」

「……、ファイアとアドールの婚礼を阻止したいんじゃないかな」

アドールとファイアは政略結婚だ。その条件に、『停戦条約』が組み込まれている。実際、両国の権力者から猛反発を受けている縁談だった。

「条約が可決されてしまう前に、ファイアを殺して阻止しようとしてるんだと思う」

「……ということは、アドール様も狙われる可能性があるのよね」

「僕が聞いてこようか？」

「……ありがとう。ごめんね。いつも頼りっぱなしで」

ファイアは知らない。穏やかな弟の本性は、もっと無機質で冷たい事を。

安心しきって目を閉じたならなおの事、ユネスの表情の変化に気づくことはないだろう。

ユネスは、気づかれるようにわざと歩調をずらし王の後を追った。

「……どうやって鏡を抜けた」

「部屋へ入れてくださいますか？」

王はきびすを返し、ユネスは扉を閉めた。

「……貴方が私を封印した際の条件は、『私が貴方の血縁者であること』。裏を返せばそれは、“血縁者でなくなれば”封印は無効

になるということですよ」

「っ！・・・自身の、王族の血を他人のものに入れ替えたのか。そんなことすればお前は」

「大方見当はついていました。メナチエデの鏡は、血縁者の封印のみではなく、禁忌の術のほとんどを可能にするものだ。おかげで私の禁忌の術も成功した」

王は深くため息をついた。

鏡の真相がどうであれ、ユネスは鏡を抜けるためだけに、王家の血を捨てた。

いや違う。

・・・ファイアか。

血の繋がりを絶てば、ファイアとユネスは姉弟ではなくなる。

彼にとつて、封印を施したあの瞬間はまさに、願ったりかなったりの状況だったというわけだ。

「愚かな」

「陛下。これ、誰の毛髪だと思えますか？」

ユネスは、つまむように見せた二本の指の間に、前触れなく髪を出現させた。

この国では滅多に見ることのない、黒の、毛髪。

「貴様まさか！！」

「そう。これにより私はヤーヌケディオ王家とは無縁の存在となり、そして現在婚約関係にあるアドールとファイアは“兄妹になり代わった”」

悲劇

それは、とても神聖な瞬間だった。

大胆にぶつけられた唇に、ファイアもそつと答える。

すこし距離を置くと、アードールの真剣な眼差しと、はち合った。

ファイアはつい目をそらす。

その仕草が遠ざけようとしたものではないと確信したアードールは、嬉しさで笑った。

「ファイア。君は私が守るよ」

・・・お前には無理だよ。

囁かれたその声は、微笑みあう二人には届かない。

アードールとファイアは、城の地下の洞窟まで来ていた。

「ファイアは、神竜を見たことはありませんか？」

「ええ。七、八歳くらいの頃に、ルア・ダ国のを一度。アードール様は？」

「私は初めてです。やっぱり、緊張するのは可笑しいですかね」

通りを照らすたいまつを一体どれほど横切っただろうか。

やがて踊り場に出た二人は、そこで顔を見合わせ同じように啞然と立ち尽くした。

「地下の、てつきり最奥部を歩いてきた気でいたけど・・・、これは凄いい」

「え、ええ」

道は平然と続いていた。ただし、頭を掠める位置にあつた天上や寄りかかれる壁などは、はるか遠くに広がっており、続く道も、道というよりは崖のようになっていた。

ひょっとして、落下した音さえも届いてこないのではないか。そ

う思うほどに崖下の空洞は深く、暗かった。

島端の絶壁ならまだしも、こんな壮大な空洞が地中に存在していて平気なのかと、アドールは変に不安に思う。

ヒュオオオオオ・・・

二人が崖の先端にたどりつくと、緩やかに風が吹き、やんだ。そして。。

「ッ！！」

フィアは肩をこわばらせ息を呑んだ。

一方のアドールは、予想よりも落ち着いた調子で、『その顔を』見上げた。

唐突に、自分たちの前に姿を現した黄金の竜。。これが。

「神竜・・・」

ユネスは今、王の施した強力な魔術の枷により動きを封じられていた。

喉には、王の向ける剣先が触れている。

「・・・アドールとフィアが、神竜の元へ向かったようです」

「ユネス。アドールの血を元に戻せ。今すぐに」

「解放された私がそれに従うとお思いですか」

「ユネス！！」

キンツ

ユネスが、繋がれている枷の鎖で、王の剣を弾く。

瞬間、折れた剣の切っ先が、王の喉を貫いた。。

アドールとフィアの関係の真相を知るものはこれで、ユネスのみ

となつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5618s/>

ヤーマケディオの王子

2011年4月30日11時45分発行